

ケイジヨシという言い方

半藤 英明（日本語学）

日本語助詞の分類上、「係助詞（カカリジヨシ）」というものが設定されている。山田孝雄博士（一八七三～一九五八）が、述語の「陳述」に関与し影響を及ぼす助詞に対して命名したものである。以来、この「係助詞」をめぐる、多岐にわたる様々な研究が行われてきた。とりわけ「陳述論」と呼ばれた討議・論争は、「係助詞」の機能や文のありようを考えるものとして象徴的に有名であるが、現在でもなお、係助詞関連の研究は活発に進行中である。

「係助詞」が如何なるものかの概要を知ろうとすれば、数多くの語学辞典・文法辞典の記述がまず参考となり、ここでは触れないが、それらの中には、「係助詞」を「ケイジヨシ」とも読む、と指摘するものが存在する。中学校・高等学校などの教育現場でも、古典語の所謂「係結び（係り結び）」をもたらず助詞としての「係助詞」を、「ケイジヨシ」と読んで教える教師が多いと聞く。しかし、筆者は、この言い方を好まない。「係助詞」は「カカリジヨシ」と読むべきも

のである。

山田博士によれば、「係助詞」は、かの本居宣長の唱えた「係」の術語に基づいて、「係（カカリ）」の機能を持つ助詞の義として冠されたものである。「係」の機能とは、述語との間に一定の関係性を持つことを意味しており、現象的には「係結び」に見られる形式上の文末拘束現象が際立つが、そればかりではなく、述語に対して文の成立を保証する役割をも担う性質のものである。その機能は「ケイキノウ」ではあり得ない。「係結び」は「カカリムスビ」であり「ケイムスビ」ではない。「カカリムスビ」の助詞であるのに「ケイジヨシ」と呼ぶのは、如何なものか。山田博士の著作、例えば『日本文法学概論』（宝文館、一九三六）の索引では、「係」「係助詞」が「か」の項にあり、「け」の項には挙げられていない。

従来、係助詞を「ケイジヨシ」と読んできたことの根拠は、恐らくは、他の助詞の名称が「格助詞（カクジヨシ）」「接続助詞（セツゾクジヨシ）」「副助詞（フクジヨシ）」「終助詞（シュウジヨシ）」「間投助詞（カントウジヨシ）」のように、ほぼ音読みである、ということである。係助詞を「カカリジヨシ」と読めば、「カカリ」の部分が訓読みとなるので、他の助詞の読み方と合わない。そこで「係助詞」全体を音読みし、「ケイジヨシ」となる。学問的背景にこだわらなければ、見事な形式美であるが、しかし、そのこと

をもって、「ケイジョシ」の読みを認める訳にはいかない、
というのが筆者の立場である。

長年にわたり係助詞研究を牽引し、その集大成として
『現代語助詞「は」の構文論的研究』（笠間書院、一九九二）
の著書がある青木伶子・成蹊大学名誉教授は、筆者との直
話において、山田博士が係助詞を「ケイジョシ」と読むこ
とは考えられない、と述べている。
（本学教授）